

熊 本 大 学

I. 実 施 報 告

(1) 実施責任者報告

熊本大学学生部長 中島 最吉

1. 放送公開講座の大学における位置づけと放送局その他の関係機関との協力関係について

本学では、放送公開講座を、全学協力して実施する「放送を利用した大学教育の開放」として位置づけ、全学的に取り組むために、「放送公開講座実施委員会」を設けている。

この委員会は、学長を委員長とし、学生部長、事務局長のほか次の3種の委員をもって組織され、企画、実施及び調査に関する事項を審議する。

(1) 各学部、教養部、医学部附属病院及び医療技術短期大学部から選ばれた教官（各1名）

各部局から教官が参加することによって全学的協力体制が確立されている。

(2) 熊本県及び熊本市から推薦させた社会教育担当者（各1名）

この委員の参加によって、地方公共団体の実施する社会教育活動との連携・調整が円滑に行われると共に、県の社会教育課を通じての県下各地教育委員会の協力のもとに、受講生募集やスクーリングを効果的に実施できる。

(3) 放送番組制作者（1名）

この委員と、本学の実施担当者や担当講師との間で十分な意見交換を行い、密接な協力のもとに番組の制作にあたっている。

また、スクーリング会場や再視聴センターの設置に関しては各市町村の社会教育関係機関と緊密な連携を保ち、その協力を得ている。

2. テーマの選定とそのねらいについて

○テレビ講座のねらい

薬という漢字には草を用いて疾病から逃れて楽になるとの語源があるように、草根木皮は薬物の原点である。今や予防医学に向かうなか、薬用植物（またはその成分）を用いて人間のホメオスターシス（恒常性）を維持しながら疾病から自己を防護したり、また漢方薬、生薬などの天然物を用いて西洋医学でも難治性の病気を治療しようという傾向が高まりつつある。本講座では、身の回りにありふれた植物にも目を向け、有益な薬草についての正しい知識を蓄積しつつ、天然薬物に関する科学について学習する。

人々の健康維持と増進に係わる薬草についての知識を収集し、漢方薬、天然医薬品の開発、薬用植物の栽培、バイテク、ひいては薬膳などを解説し、潤いのある豊かな社会造りの一助となることをねらいとしている。

○ラジオ講座のねらい

愛は大切なものだ。愛するものを持たずまた、愛されることもないときは、生きる充実感を得ることはできないだろう。愛はしかし、喜びを生むと共に、苦悩やそして絶望をさへ招き寄せる。古人もまた愛における喜怒哀楽の跡を、文学作品の中に、さまざまな形で残している。われわれ自身をふりかえる鏡として、古典作品の世界の散策を試みる。古典文学に親しむこと、そして、私たち自身の生き方、愛し方をふりかえること。それが本講座の目的である。

3. 番組、印刷教材、学習指導の関連づけについて

本学の印刷教材は市販されず、受講生だけしか入手できないので放送番組は印刷教材を持たない一般視聴者でも理解できるような独立した内容をもたなければならない。一方印刷教材も聴講の際の単なる補助教材ではなく、それを読むだけで一応理解できるものでなければならない。従って、本学では、放送番組と印刷教材はテーマを同じくし、同じ講師陣によって制作されるものの、両者は互いに独立したものというたてまえをとっている。

一般的に言えば、印刷教材には、そのテーマに関して講師が述べようとする内容全体の骨組みを書き込むが、放送の際にはこれに肉づけをし、わかり易く説明する必要がある。しかし一方では時間の制約上、書き込んだ全内容を述べることができないというのが実情である。従って、スクーリングでは、放送番組に盛り込めなかった内容について説明し、質疑に答えることが主になる。

4. 番組の学習効果について（講師の印象、受講生の反応等から）

テレビ講座「薬用植物—医薬をささえるもの」は、最近の漢方薬ブームの影響もあり、受講生は40才以上の中・高年齢層が90%を越え、全般的に好評であった。民間薬と漢方薬の違いや、麻薬についてよく理解できたという感想が多かった反面、実地指導を通して具体的な薬草の配合などについてもっと詳しく教えて欲しかったという声もあった。また、講義のポイントをしばらく、内容をもう少し深く掘り下げて欲しいという少数意見もあった。

ラジオ講座「日本古典文学における愛のかたち」は、取り上げられているテーマのために、テレビ講座に比べて30才代以下の受講生がやや多く約14%であった。全体を1人の講師が通して担当するという新しい試みであったが、非常にわかりやすく効果的であったという感想が多く、続編の講座の設定を望む者や、講座とは別に講師を囲む座談会を考えて欲しいという者もいた。しかし、講師が1人であるために、スクーリング会場を熊本県立図書館での3回だけにしたことや、その時、録音取りも兼ねたことについてはかなり不満の声もあった。

両講座共にスクーリングを県内各地で行い、時間や回数も増して欲しいという要望が多いが、講師やスタッフの能力に限界があり、必ずしもその要望に十分こたえられないのが現状である。受講生の学習意欲を損わないように再視聴センターの設定などをさらに工夫し、受講生の便宜を計りたいと考えている。

5. 印刷教材の作成過程について

○ 以下のテキスト作成要領に従って、各担当講師は原稿を作成し、主任講師が全体の整理・編集を行った。

*平成2年度テキスト作成要領

1. 頁数は、200頁程度とする。
2. 判型は A5版とし、各頁縦書きの場合は50字詰19行、横書きの場合は35字詰28行とする。
3. テキストの頁数は、200頁（1 講義当り14～16頁）を基準とし、原稿枚数は所定の原稿用紙（400字詰）30枚を1 講義当りの標準とする。（30枚のうち、3分の1程度を図表、写真、参考文献に当てる。）
4. 表題、記号の順序、講師紹介の書き方等については、各講座ごとに統一する。
5. 用字用語は常用漢字、現代仮名遣い、新送り仮名による。

（留意事項）

- ① 本文は、テキストだけでも独立して読めるものとし、放送内容のあらすじを述べられているならば、必ずしも放送内容と文字どおり一致する必要はない。
- ② 図表、写真等の原稿には番号を付し、印刷方法並びに挿入箇所を明記する。
- ③ もし必要であれば、本文のあとにサゼッション等を箇条書きで付記する。

6. 校 正

校正は3枚とし、執筆者が行う。

7. 原稿提出

執筆者は、3月23日(金)までに主任講師へ提出し、主任講師は、全体を整理し、印刷に必要な事項を指定のうえ3月30日(金)までに学生部へ提出する。

6. 学習指導の実施状況について

本年度のスクーリングは、テレビ講座は熊本市を含む4地区で実施したが、ラジオ講座は講師が1人であるため、熊本市だけで行った。熊本市の会場は前年に続いて熊本県立図書館で行ったが、設備が整っていることや交通の便が良いために出席が多く好評であった。また、再視聴センターは、熊本大学附属図書館を含め5カ所に開設した。

○ テレビ講座

全体のスクーリングの出席率は、第1回目が全受講者（573名）の61.8%、第2回目は44.2%であった。三角会場の第1回目は94人中91名が出席し、このテーマに対する関心の高さを示していた。

○ ラジオ講座

受講生の総数は前年度の636名の半数近くの306名であったが、第1回目129名（42.2%）第2回目96名（31.4%）のスクーリングの出席数は、会場が熊本市1カ所だったことを考慮すれば、かなり高率であったと考えられる。そのことは出席者の熱心な受講態度や、質問の多さからも裏付けられると思う。

○ スクーリングの実施場所及び日時は次のとおりである。

テレビ講座

（地区名）（実施場所）（実施日時）

矢部地区 矢部町中央公民館 第1回 平成2年10月18日(木)13:00～15:00

第2回 平成2年11月7日(木) //

熊 本 大 学

水俣地区	水俣市公民館	第1回	平成2年9月22日(土)13:30~15:30
		第2回	平成2年11月10日(土) 〃
三角地区	三角町公民館	第1回	平成2年9月13日(木)14:00~16:00
		第2回	平成2年10月24日(水) 〃
熊本地区	熊本県立図書館	第1回	平成2年9月1日(土)14:00~16:00
		第2回	平成2年10月13日(土) 〃
		第3回	平成2年11月24日(土) 〃

ラジオ講座

(地区名)	(実施場所)		(実施日時)
熊本地区	熊本県立図書館	第1回	平成2年10月6日(土)14:00~16:00
		第2回	平成2年10月27日(土) 〃
		第3回	平成2年12月8日(土) 〃

7. 「大学教育の地域社会への開放」に果たす役割について

大学は、社会の要望に応じて、その教育・研究の成果を地域社会に開放する責務がある。本学においても、各部局がそれぞれ公開講座を行うと共に、全学が協力して放送公開講座に取り組んでいる。特に放送公開講座は、放送メディアとスクーリングを併用するため、地域の人々の生涯教育に果たす役割が大きいと考えられる。ただ、放送時間が限定されており、スクーリングに出席する時間的余裕等の関係上、受講生の大部分が定年退職者や家庭の主婦ということになってしまう。

昨年開設した熊本県立図書館の再視聴センターは、日曜日にも利用でき、交通の便も良いため利用者の格段の増加を見ることができたことからわかるように、勤労者の一層の活用を計るためには、再視聴センターを設置する各地の公的機関の協力を得て、利用時間、設置場所などの点で十分な検討をする必要があると考えている。

8. 「大学の授業への活用」の状況と今後の可能性について

放送講座の授業への活用は、教養部の総合科目に於いて試みられている。一つのテーマについて複数の教官がそれぞれの専門の立場から講義をする形式が講座を活用しやすくする面を持っている。

内容的には追加補足を必要とするために、13回の中心テーマごとに2回の講義時間を当て、その1回目にビデオを見て感想などを書かせ、2回目に補足の講義を行い、内容をさらに深めるようにしている。

昭和60年度のテレビ講座「水と人間」昭和63年度の「音と人間」は、その翌年から同名の講座を総合科目の中に設け、ビデオの活用を行っているが、学生の反応はきわめて良く、出席率も高い。また逆に総合科目のテーマに基いて放送講座を作った経験も持っている。昭和58年度の「薬の科学」で、その時のビデオの一部も適宜に利用されている。

一般的に言って、テレビ講座の方がラジオ講座よりも活用しやすい面があると思うが、ラジオの場合も関連のある科目の自習教材（テープを聞いてレポートを提出させるなど）としての

活用の可能性は考えられると思う。専門教育よりは一般教育の方が活用しやすいと考えられるが、いずれにしても、各教官が利用しやすいようなライブラリーを設置することが必要であろう。

9. 実施上の問題点と今後の課題等について

- 本年度は、テレビ講座のスクーリング会場を昨年度より1会場少ない4会場で、ラジオ講座は1会場で行ったが終了後のアンケートでは、両講座共に県内各地に会場を設置し、回数も多くして欲しいという要望が多かった。スクーリングが講義を理解する上できわめて重要であるばかりでなく、講師から直接話を聞き、質問もすることができるという満足感を得るためにも不可欠であることは十分理解できるが、本年度のラジオ講座の場合、講師が1人であるための時間的制約や、事務スタッフの能力の限界などから、要望に応じ難い状況である。今後色々な角度から再検討するべき課題だと考えている。

- 本学は昭和55年度に放送講座に参加して以来、テーマの選定については、地域社会の人々にとって関心や興味の高いと考えられるテーマを選び、できる限りわかりやすく制作することを基本的に考えてきた。そのことは大学が生涯教育の一端をになうことにもなると考え広報活動も社会教育関係機関との連携を主に行ってきた。ただ講義内容のレベルの点から、果して大学教育の開放と言えるのかという反省の気持ちがなかったわけではない。

平成3年度に予定されているテレビ講座「計測と制御」は内容的にレベルも高く、主な対象となる受講生は各企業で働くエンジニアになると予測される。このようなテーマは初めての試みであり、広報の方法も工夫すべきである。制作に当たっても現在までの受講生にもいくらかでもわかりやすくするように努力したいと考えている。

(2) 科目担当主任講師の所見

(テレビ科目) 薬用植物一医薬をささえるもの一

主任講師：薬学部教授 野原 稔弘

現代において薬物の処方箋に記載される約4割は何らかの形で天然物に関連あると言われる。近年、漢方薬が保健診療に採り入れられて以来、漢方薬の使用は伸びつつあり、これらの原料となる天然物のほとんどを占める薬用植物、生薬の需要も増加の一途を辿っている。専ら身近な民間薬も注目されるようになり、これらの薬用植物に関する知識も蓄積されつつあると言えよう。

本講座は、これらの薬用植物に目を向けて、身近な薬草、有益な薬草についての正しい知識を蓄積しつつ、熊本の薬草、民間薬の紹介から漢方の薬理、天然薬物の製剤、薬用植物の栽培、ひいてはバイオテクノロジーの一端に至るまで、天然薬物に関する科学について学習する目的で開講された。

さて、本学薬学部のみで、薬用植物に関する13回の講座を持つには到底無理であり、また、薬用植物に関する知識はある程度行き渡っているので、今回より良き番組を目指し、熊大の枠

を思い切って外し、富山大学和漢薬研究所、熊本工業大学、九州大学、長崎大学、徳島大学、武田薬品から各1名宛ての先生がたのご協力を仰いだ。これによって、学生部の職員の方々、並びに制作テレビ局（熊本放送）担当の諸氏には多大のご迷惑をおかけすることになったが、内容的にはある程度立体的に組むことができたと考える。この様な興味ある身近なテーマについて、系統的なシリーズで未だ公開講座で採り上げられていなかったのも、この機会に是非というスタッフの意気込みが感じられた。しかしながら、薬用植物を撮影するとあって各地にロケしたり、また、担当講師を熊本にお呼びする旅費等、これまた制作当局の例年と異なる経費アップやご心労を生むことになり心痛んだ。テキストとて、カラー写真が圧倒的に多くなり、昨年の2倍の価格になった。

以上のような隘路はあったが、スクーリングで地方に行ってみると、出席者の大部分はお年寄りの方々が殆どとはいえ、どの会場ともいっばいで、皆熱心に質問、討議して頂いて、初めて受講生の関心が高かったことに私共若干胸をなでおろした次第である。

制作していくプロセスで、放送局の制作ディレクターの言葉は私の脳裏に強く残っている。“テーマとしては地域が抱える課題や地域住民の関心の高い問題に先端的な学問研究の成果を活用しながら、クロスオーバー的、学際的に接近していくことができれば……。そして新しい発見が映像に行かせれば……。”と。

（ラジオ科目） 日本古典文学における愛のかたち

主任講師：教育学部教授 中本 環

テーマについて

愛という普遍的な問題を、日本古典文学の諸作品をながめることによって考えるのが、目的であった。熊本という一地方に密着した問題をとりあげることと共に、一方で、人間としての一般的な問題をとりあげること必要で、従って今回は、愛をテーマとしてとりあげた。古典における愛ではあるが、現代における我々の生活の中の愛を考えるということが、中心的なねらいであった。

内容について

13回の放送分は、すべて愛に関わる話であるが、取り扱う作品は、1回1回異なる。ものへの愛、タブーの中での愛、愛と疑い心、愛欲についての価値観、愛と死等、現代における愛の問題の直接かかわる内容を、古典作品の中から取り上げて考えていった。テキストでは、古典の原文そのものを、部分的に記載しているが、放送では原文の紹介は少なくなるよう配慮した。聞いてわかり易い、ということを中心にし、話の内容も、現代の話題などを取り込みながら話すようにした。

放送について

テキスト中の原文やあるいは説明部分の重要なところは、アナウンサーに朗読してもらった。原文の朗読は特に際立って印象深く受講生に伝わったのではないかと思う。講師の話の単調さ

を、すくったようである。

テキストについて

テキストは新書版より少し大きいハンディなもので、持ち運びに便利であったと思う。記述の方法は、原文を引用しながら説明していく述べ方であるため、原文部分で難しいと思った受講生が多かったかもしれない。但し、原文には訳文をそのあとにつけるのを原則としていたから、むづかしさを半減できてはいたろう。テキストは読み易いということが大切と考え、本文には、ルビを多めにつけ、むづかしい漢字は用いないよう心がけた。が、後で読み返すと、やはりまだまだ、全体に用語、用字等の面で、やさしくする必要があると反省した。

製本については、受講生から紙がはずれる、インクの濃淡があって読みづらい等の指摘があった。以前にくらべだいぶよくなったが、印刷、製本にはもっと配慮する必要がある。

スクーリングについて

熊本県立図書館で3回のスクーリングが開かれたが、いずれも会場いっぱい120人程度の出席があった。質問も出て、受講生の熱心さがうかがえた。

スクーリングが県下全体にわたって行われたのではなく、3回とも県立図書館であったことは、問題を残すかもしれない。現在では、車の普及や道路の整備で、県下から熊本市に出ることはほぼ可能で、これでもよかったかもしれない。土曜の午後でもあり、出席者の数は多かった。

その他

テーマが愛であったためか、感想や意見を講師に伝える人がわりにあった。受講生以外の人からの感想や意見であって、これら一般の聞き手をどう扱うか、今後の問題と思う。

テキストを、大学の講義に活用するにはどういう手続きが必要か。市販の問題も含めて、今後の検討が必要であろう。

II. 制 作 報 告

(1) 制作責任者報告

熊本放送テレビ局付部長 本田 郁子

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

熊本大学公開講座は今年11年目となった。スタート時は、大学の講座を一般市民に開放していくこと自体、まだもの珍しい感じもなかったが「生涯教育」という言葉が「生涯学習」と変わり、一度社会に出た人々が再び学習するというシステムも、次第に定着してきているといえよう。文部省がまとめた平成2年度国立大学公開講座数を見ると、一般市民向けに、93国立大学で、713講座が開設されている。熊本でも、熊本大学をはじめ県立私立合わせて4大学で公開講座が始められている。このような中で、ラジオ・テレビメディアをつかつての熊本大学公開講座は、県域を越えての広範囲な大学の講座として、人々に学習のチャンスを開いたものである。

大学の講座という水準を保ちながら、学習意欲を持った一般視聴者の目や耳にくいこむために、こんな方法で、どんな構成をするか。番組制作者が最も心を砕く点である。

熊本大学の主催する公開講座実施委員会は、各学部代表する大学側委員、県市社会教育課委員、熊本放送から制作者としての1名の委員が任命され、構成されている。前年のテーマ検討会議から各委員は参加し、テーマと主任講師決定後は、主任講師と担当ディレクターとの打合せに入る。

市町村の協力で、県下各地に設営された会場には、町村単位での聴講生が集まって、期間中会場毎に2～3回のスクーリングが開かれる。制作者も、スクーリング会場で聴講生に接し、講座の手ごたえを把握できる。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

テレビ 「薬用植物～医薬をささえるもの」

明治以来、日本の医学は西洋医学一辺倒となり、東洋医学は姿を消した。しかし、現在、薬漬け医療や薬害といった経過を経て、漢方薬が見直されてきた。

漢方薬と昔から伝わる民間薬に人々の注目が集まって、その科学的根拠を追求する関心は高く、今回の「薬用植物」というテーマはタイムリーであり、各スクーリング会場は、暑さもとわぬ聴講生が溢れた。

薬用植物は四季を問わず花をつける。県内はもちろん、関東、関西、四国、長崎、福岡と、時に合わせて各地に取材し、番組の半分はVTRを挿入し臨場感を持たせた。放送も回を重ね、後半では「トリカブト事件」がクローズアップされ、薬用植物への関心が高まった。

講師も、熊本大学の枠を越え、長崎大学、九州大学、富山薬科大学、徳島大学、武田薬品、生体機能研究所の専門の先生方に出演していただいた。

ラジオ 「日本古典文学における愛のかたち」

古典文学の中で愛に生きる人々の生き方は、時代は変わっても、現在に相通うものがある。第11回の「愛と生きがい」などは、現代女性の生きがい論にも通じ、「人間いかに生きべきか」という人生論にも結びつくものだけに、スクーリングでは40代～50代の女性が多く見受けられたが、聴取率を見ると、18歳～24歳の女性が1.5%と突出している。講師一人が13回を通した初めての試みは、講師の魅力的な話し方や内容で、成功であった。スタジオ聴講生はおよそ28名。最終回まで熱気ある聴講風景で、スタジオ聴講生忘年会にまで発展した。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

[テレビ]

視聴率調査によると平均2%と昨年をはるかに上回る伸びである。第5回「民間薬～身近な薬草の正しい知識」は、4.6%と前代未聞の高視聴率となった。

スクーリング会場でも40代～50代の女性が多く活気があった。楽しくて生活に役立つと好評であった。

[ラジオ]

「古典文学における愛のかたち」は平均聴取率は0.1%と低かった。しかし、18才～24才の女性の聴取率は1.5%と若い女子学生に多く聴かれた。

スクーリング会場では40代～50代の女性が多く、古典文学の鑑賞にとどまらず、人生いかに生きべきかを考えさせる講座と、毎回補助椅子を出すほど満員であった。例年のRKKスタジオ聴講生から、今後、文学を勉強するグループとして育てて欲しいとの要望が出されている。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

再視聴センターの利用は熊本市以外ではあまり利用されていないが、公共施設の休みが利用しにくくしているのではないかと。

大学として、どんな講座が企画出来るのか、市民はどんな講座を希望しているのかを常日頃リサーチしたり情報交換する場が必要と思う。

(2) 番組制作担当者の所見（テレビ科目）

制作担当者：熊本放送テレビ局制作部次長：藤井 昭

平成2年度、熊本大学放送公開講座は「薬用植物」～医薬をささえるもの～をテーマに9月7日(金)から、11月30日(金)まで、毎週金曜日午前10時30分から11時15分まで、13回にわたり放送した。以下は、平成2年度、熊本大学放送公開講座を終った制作担当の所見である。

(1) 制作に当たって、当初、制作担当者は、どのような番組づくりを心がけたか？

「薬用植物」や「生薬」という言葉には、漢方薬や民間薬というイメージが付きまとう。言うまでもなく、漢方薬は、大変なブームを呼んでいるにもかかわらず、その科学的機序は、明白でない。「薬用植物」医薬をささえるものは、人間と天然生薬との歴史的な関わり

を基本に、現代医薬に対する貢献について、科学的にその機序を明らかにしながら、将来に対する可能性を探るものであった。

身近な植物や民間の伝承の中に、現代薬学のメスを入れ、不思議な薬効の謎を科学的に明らかにすることが、番組全体を通しての狙いであった。

(2) テーマは十分に貫徹できたか？

春先から、初冬まで、九州各地を中心に、北関東から北陸まで、様々な薬用植物を取材撮影し、とかく硬質で講座的になりがちな番組をヴィジュアルでアトラクティブなものに出来たと思う。また、長期にわたる取材は同一植物の成長の過程を映像化することを可能にし、科学的、論理的な展開のなかに「生きている」ことを実感させることが出来たと思う。

結論を言えば、制作担当者として、大変楽しい番組づくりをさせてもらったと思っている。

番組制作担当者の所見（ラジオ科目）

制作担当者：熊本放送ラジオ局制作部 金沢 伸哉

「いつの世も古くて新しい愛の問題に興味深く分析して聴かせて頂きました。」

「古典とは遠い世界のものと思いましたが、こんなにも自分の身近なものかと面白くお聞きしました。」熊本放送が実施したスタジオ聴講生はこのような感想を述べている。

11年目の今年のテーマは「日本古典文学における愛のかたち」。熊本大学の中本教授が、多様な人物像と、それを取り巻く時代の背景などを蘇らせ、どの講座も充実した内容となった。聴講者の感想にも「人物について興味が出てこれからも勉強したいと思う」とあった。

登場する人物も、良寛、一休、平家物語の岐王、吉田兼好、藤原道綱母らと多彩であったが、従来の人物中心、書物中心と違って「タブーと愛」「哀しい愛」など講座毎に「愛のかたち」を変えたことで、さまざまな愛が表された。

特に今回は、一人の講師が13回の全講座を担当したことにより、「ラジオ聴取者の親しみ」を生み全講座の流れが、明確となってきたように思われる。

熊本大学の公開講座は、昭和55年以来、スタジオ聴講生システムをおこなっている。今年は28人の申し込みがあり、毎回スタジオ聴講生を前に、公開録音を行った。講義の前に、講師が前回は復習し今回の要旨を20分ほど述べ、その後に録音を開始。講義の後、質疑を行うスクーリングの時間を30分ほどとり、聴講生の理解を深めるよう配慮した。

録音は前回まで、水曜日の夜に行っていたが、今回は土曜日の午後2時から開始した。このためか、約半数は「初めて」の参加者で、「今後も土曜日かウィークデーの午後に」実施してほしいという声が3分の2を占めた。

スタジオ聴講生はラジオの聴取者の一つのモデルであるが、40代から77才までの聴講生を前にした公開録音は、講師が語りかける口調となり、聴きやすかったようだ。

また随時、女性アナウンサー（長曾我部）の朗読を入れて、講座の内容に幅をもたせるよう

努めた。朗読に魅せられたとの反応もいただいている。

なお、今回は大学が実施したスクーリング会場でも一部収録した。

講座を終わっての感想はさまざまな愛のかたちが表現され、「文学はチンプンカンプンの私ですが、面白かった」との評もいただいている。

今後のテーマとしては、文学、歴史のものを勉強したいという希望も出されていた。

III 講座の概要

◎ 科目の概要

科 目 名	中心的なテーマ	科目のねらい	内容・方法	放送曜日・ 時間・期間
薬 用 植 物 —医薬をさ さえるもの (テレビ)	薬という漢字には草を用いて疾病から逃れて楽になるとの語源があるように、草根木皮は薬物の原点である。今や予防医学に向かうなか、薬用植物（またはその成分）を用いて人間のホメオスターシス（恒常性）を維持しながら疾病から自己を防護したり、また、漢方薬生薬などの天然物を用いて西洋医学でも難治性の病気を治療しようという傾向が高まりつつある。本講座では、身の回りにありふれた植物にも目を向け、有益な薬草についての正しい知識を蓄積しつつ天然薬物に関する科学について学習する。	人々の健康維持と増進に係わる薬草についての知識を収集し、漢方薬、天然医薬品の開発、薬用植物の栽培、バイテク、ひいては薬膳などを解説し、潤いのある豊かな社会造りの一助としたい。	ビデオ、スライドなどの映像を駆使して、身近な薬草から漢方薬、さらにはバイオテクノロジーを応用した薬用植物の新しい利用までを紹介する。	毎週金曜日 10:30～ 11:15 9月7日～ 11月30日
日本古典文学における 愛のかたち (ラジオ)	愛は大切なものだ。愛するものをもたず、また愛されることもないときは、生きる充実感を得ることはできないだろう。 愛はしかし、喜びを生むと共に苦悩やそして絶望をさへ招き寄せる。 古人もまた愛における喜怒哀楽の跡を、文学作品の中に、さまざまな形で残している。われわれ自身をふりか	古典文学を親しむこと、そして、私たち自身の生き方・愛し方をふりかえること。それが本講座の目的である。	平安時代から江戸時代の末までの作品から、適宜本文をあげ、これに解釈を加えて鑑賞し考察する。現代の問題を考えるとという視点を、失わないようにする。	毎週日曜日 21:10～ 21:55 10月7日～ 12月30日

	える鏡として、古典作品の世界を散策してみる。		
--	------------------------	--	--

◎ 科目の構成

(テレビ科目) 薬用植物—医薬をささえるもの

放送 月 日	中 心 テ ー マ	各 回 の 内 容	担 当 講 師
第 1 回 (9 月 7 日)	薬用植物概説	薬用植物の歴史は人類そのものの歴史でもあり、人間は植物をうまく薬用として利用してきた。本講ではまず生薬の来歴を簡単に引き上げ、また薬用となる主な“生薬たち”を紹介する。さらに現代における薬用植物の利用の方法—そのまま使用したり、また一成分を抽出、分離したり、さらに有用物質を取り出し医薬品に変換したりする方法等について概説する。	熊本大学薬学部教授 野 原 稔 弘
第 2 回 (9 月 14 日)	国際花と緑の博覧会 「バイオと薬草」	新しい21世紀を目前にした1990年わが国で4番目の国際博覧会として「国際花と緑の博覧会」が大阪で開催されます。その“山のエリア”の「バイオと薬草」区画では、“憩い・生命のリフレッシュ”を基本テーマに、自然を慈しみ、人々の健康維持と増進に努めバイオの先端技術を駆使して21世紀を目指そうとする姿勢を表現していますが、それらを映像で紹介いたします。	武田薬品・理事 貴 志 豊 和
第 3 回 (9 月 21 日)	熊本の薬草 —阿蘇・五家荘・ 天草の植物—	県内に分布する植物の特徴として、1)大陸系の種類(ヒゴタイ、シオン、ヤツシロソウ)阿蘇・久住に、2)ソハヤキ要素と呼ばれる日本固有種(キレンゲショウマ、ヒゴイカリソウ)が中央構造線上の五家荘・五木に、3)南方系の植物(ヘゴ、アオノクマタケラン)が天草・芦北南部にみられる。これらの中から熊本の薬草を探る。	熊本工業大学助教授 濱 田 善 利
第 4 回 (9 月 28 日)	毒と薬 —有毒植物の話—	本講ではまず私達の身近に存在する有毒植物(例:スズラン、ジキタリス、チョウセンアサガオ、ヨウシュヤマゴボウ等)について紹介する。有毒植物についての正しい理解が、安全な薬草利用につなが	熊本大学薬学部助教授 矢 原 正 治

		るからである。また、毒と薬は表裏一体で、両刃の剣のごとく毒（例：トリカブト、ジキタリス、ヒヨドリジョウゴ）をうまく使えば薬になる。	
第 5 回 (10月 5日)	民間薬 —身近な薬草の 正しい知識—	野山に自生している薬草や、庭や畑に植える薬草など、薬用植物は身近な所にも少なくない。民間療法の主役となって家庭で使われるものを民間薬と呼ぶ。昔からその地方に伝えられてきた薬草には、今でも十分に使用にたえるものがある。採集から適用まで、正しい使いかたを考えよう。	熊本工業大学助教授 濱 田 善 利
第 6 回 (10月 12日)	薬草園への誘い	熊本大学薬学部附属薬用植物園（薬草園）は、肥後細川家の御薬園（蕃滋園）以来の歴史をもつ全国で最も古い薬草園の一つである。この薬草園の案内を中心に、充実した内容を擁する京都薬科大学薬草園、また漢方の現場を踏まえた園である(株)ツムラの薬草園を訪れ、薬用植物の実際の形態、効能、用法などを紹介する。	熊本大学薬学部助手 金 城 順 英
第 7 回 (10月 19日)	わかり易い漢方薬の話	一般に漢方薬を使用したと思っている人の中には、民間薬を用いている人も多く、本当の意味での漢方薬を用いている人は案外少ないものです。漢方薬と民間薬の違いを述べるとともに、生薬を組み合わせると薬効が変化する生薬を通して、漢方薬の薬効を説明し、漢方薬の選定に症状がどのように関与しているかについて考える。	徳島大学薬学部助手 村 上 光 太 郎
第 8 回 (10月 26日)	漢方薬の実際 —現代の日本における 処方箋の適用—	すでに漢方医学の古典に、処方の適用方法は詳述されている。それは最大の薬効をあげるように工夫された臨床経験の賜物である。本来はその注意を守って使うべきものではあるが、現代の社会生活上では、いろいろと制約をうける。そこで今のエキス製剤は漢方薬の現代化として評価できる。これらの使い方を実際を鳥瞰する。	熊本工業大学助教授 濱 田 善 利
第 9 回 (11月 2日)	漢方薬のききめを探る —西洋医学的アプローチ—	漢方薬の効能（効き目）は専ら経験的なもので、科学的・客観的に証明されている例は極めて少ない。漢方薬には本当に確実な治療効果があるのだろうか？ 何故効くか説明できるのだろうか？ 本	熊本大学薬学部教授 宮 田 健

		講座では私達の病態動物を用いた実験成績を基にして、漢方薬の効き目とその機序（からくり）に科学的な光をなげかけると共に、薬理学的立場から漢方薬の正しい使い方についても考えてみたい。	
第10回 (11月 9日)	天然薬物の最適処方 を求めて	高齢化社会を迎え、また疾病の多様化に伴い、より安全で使いやすい薬の開発が望まれている。モルヒネなどの天然物由来の薬物を例にとり、最新の製剤技術や添加物を用いて薬物の放出および吸収過程を制御しながら、製剤の有効性、安全性、使用性を高める工夫について述べる。	熊本大学薬学部教授 上 釜 兼 人
第11回 (11月 16日)	薬用植物の栽培	漢方のブームにともなう生薬の需要の拡大、イネの減反政策にともなう代替作物として、また漢方用の生薬のほとんどが中国に依存している現状をふまえて、薬用植物の栽培が重視されるに至った。これにたいして、将来の生産基地として九州が注目されている。熊本県の菊鹿町および長崎大学の薬用植物園において、それらの栽培を紹介したい。	長崎大学薬学部助教授 大 橋 裕
第12回 (11月 23日)	薬用植物のバイオテク	薬用植物とバイオテクノロジーの関係は、近年広範にわたる分野で発展している。これらは医薬品を細胞、器官培養で製造しようとする方向と、コピー植物の作出、ウィルスフリー株の育成、細胞融合や遺伝子組換えによる新品種の作出等、品種改良を指向するものに分類される。これらにつき研究室での実験風景を混え紹介する。	九州大学薬学部助教授 正 山 征 洋
第13回 (11月 30日)	くすりと食物	くすりと食物、その源は一つであるということが東洋における「薬食同源」の考え方です。そしてこの考え方により薬用価値のある何種類かの食物を配合して調理した中国独特の料理が「薬膳」です。この回では薬膳を中心に、「食べながら病気を治す」または「病気にならないために食べる」ということに焦点をあて、食物と健康について学びます。	富山医科薬科大学教授 難 波 恒 雄

(ラジオ科目) 日本古典文学における愛のかたち

放送回 月 日	中 心 テ ー マ	各 回 の 内 容	担 当 講 師
第1回 (10月 7日)	人との	人は人をも愛するものであろうか。 犬や鳥など動物との心の交流はあちこち で見聞きする。が、さらに、春の風や光 や川岸の花などにさへ、限りなく心の通 うことがある。ものはものとしてのみあ るのではない。という古人のつぶやきが きこえてくる。	熊本大学教育学部教授 中 本 環
第2回 (10月 14日)	手まりつき	大のおとなが日がな一日、村の童たち と手まりをついて遊び暮らすということ が、良寛に可能であった。なぜだろうか。 それは自己の愚の意識や、心の痛みの 体験とつながっていたにちがいない。	〃
第3回 (10月 21日)	愛とうた	69歳の良寛と29歳の貞心尼は、年齢の 差をこえて、みずみずしい愛の関係を 持った。うたという風雅が、人間に付着 する夾雑物をそぎ落とし、二人の間を清 くしたのであろう。そして、価値観の共 通性が二人を結ぶ強いきずなになったの であらう。	〃
第4回 (10月 28日)	タブーと愛	愛をかたく禁じられている一人の僧 が、盲目の門付け芸人・瞽女を愛してし まった。その愛をしかし決してかくすこ とも恥じることもなく、むしろ人間本来 の問題として、世間に禅界に提示した。 その破戒僧一休と森侍者の愛と性の形を みる。	〃
第5回 (11月 4日)	複数の愛へ	一人の女(二条)が三人の高貴の男性 に求められ愛されてしまった。一人はミ カド。そのミカドに仕える若い貴族。そ してミカドの弟・最高位の僧。それぞ れの子をさへ産みながら、むくわれ実を結 ぶ愛はなく一人の旅に出る。	〃
第6回 (11月 11日)	愛の世界から旅へ	三人の高貴な男性に愛された二条は、 都を追われ遠くはるかな旅に出る。孤独 の途次で出会うかつての恋人ミカドは、 決して消えぬ愛を誓う。 宮中での愛の思い出を胸に、しかしそ の思い出を超える心の世界を求めて、旅 を続けていく。	〃

第7回 (11月 18日)	哀しい愛	一度は愛をうけながら、男の気まぐれに捨てられる女性は、昔はことに多い。捨てられた後にたどる道は、さまざま。高貴な女も身分低い女も、同じ哀しみの影をひく。平 清盛に愛された岐王、後深草天皇に招かれた傾城も同様であった。	〃
第8回 (11月 25日)	愛・死にのぞんで	死をどう迎えるか。あるいは逝く人をどう送るか。愛する人を送るのに最も大切なものは、心。その心をどう伝えるか。今はない連歌という文芸に、その可能性の一つをさぐる。	〃
第9回 (12月 2日)	愛欲のあらし	聖人・高僧といわれる人びとも、愛欲の炎に身を焦がすことがある。それをおさえつけ修業に打ち込むのが通常道である。が、鬼となってまでも執着する男もいる。キサキに迷った聖人は鬼となり、キサキもこれに応えた。	〃
第10回 (12月 9日)	愛と疑心	自分の愛した女がなぜか家を出て行ってしまった。泣きさけんでもわからない。やがて帰って来た女を、男はどう受け入れるか。伊勢物語の中のこの問題は、男と女の愛の差をさまざまに提示する。	〃
第11回 (12月 16日)	愛と生きがい	結婚当初、女性にとっての生きがいは相手の男性。ついで子供に移っていく。かげろう日記の作者道綱の母のたどった道だ。さて子供が離れていった時、どこに自らの支えをおくか。それは全く現代の問題でもある。	〃
第12回 (12月 23日)	庶民の愛のすがた	額に汗して働く者同志の男女の愛は、昔も今もあまり変わらないようだ。中世室町時代の小歌には、素朴で虚飾を知らない庶民の姿が、見えてくる。 平安朝や鎌倉期の和歌に見られぬストレートな表現が見える。	〃
第13回 (12月 30日)	愛の果て	日本の美女の代表は小野小町。小町のようないい女ともいう。深草の少将に百夜通いをさせながら、果てはドクロとなって野ざらしとなった小野小町。浮世の果ては皆小町なり、と芭蕉は詠んだ。	〃

◎ 受講生の募集等

テレビ講座 575名

ラジオ講座 302名

◎ スクーリング

テレビ講座

地区名	実施場所	回数	実 施 日 時
矢 部	矢部町中央公民館	第1回	平成2年10月18日(木) 13:00~15:00
		第2回	平成2年11月7日(木) 13:00~15:00
水 俣	水俣市公民館	第1回	平成2年9月22日(土) 13:30~15:30
		第2回	平成2年11月10日(土) 13:30~15:30
三 角	三角町公民館	第1回	平成2年9月13日(木) 14:00~16:00
		第2回	平成2年10月24日(木) 14:00~16:00
熊 本	熊本県立図書館	第1回	平成2年9月1日(土) 14:00~16:00
		第2回	平成2年10月13日(土) 14:00~16:00
		第3回	平成2年11月24日(土) 14:00~16:00

ラジオ講座

地区名	実施場所	回数	実 施 日 時
熊 本	熊本県立図書館	第1回	平成2年10月6日(土) 14:00~16:00
		第2回	平成2年10月27日(土) 14:00~16:00
		第3回	平成2年12月8日(土) 14:00~16:00

◎ 再視聴

開 設 場 所	期 間	開 設 場 所
矢 部 町 中 央 公 民 館	9月20日~12月25日 1月7日~1月12日	9時~17時、土曜日は9時~12時 日曜日・祝日は開設しない。
水俣市教育委員会 社 会 教 育 課	9月20日~12月25日 1月7日~1月12日	〃 〃
三 角 町 公 民 館	9月20日~12月25日 1月7日~1月12日	〃 〃
熊 本 大 学 附 属 図 書 館	9月20日~12月25日 1月7日~1月12日	〃 〃
熊本県立図書館	9月19日~12月27日 1月5日~1月12日	9時30分~17時、月曜日、祝日及 び毎月の末日は開設しない。